

2025年大阪万博意見書 齋藤精一

■万博の役割（BIEより）

万博とは、公衆を教育すること、イノベーションを共有すること、進歩を促進すること、協力を促進することを目的とする国際的なイベントである。

An Expo is a global event that aims at educating the public, sharing innovation, promoting progress and fostering cooperation.

（出展：BIE ウェブサイト）

■近年の万博の個人的なイメージ

近年万博は各国が自国のイノベーションを発表する場となり、その多くはテクノロジーによったものが目立っているように思える。そのため様々なテクノロジーのショーケースの印象が強くなり、特に近年ではエンターテインメントの要素が強くなったように思える。これは時代と共に進化してきた万博という場としては自然なことだが、国費で万博に出ることで何を伝えるべきか、またそれがどの様に自国の産業や文化の発展に関与することが出来るのか疑問も多くある。今回の大阪万博は自国開催の万博であるため、万博を更に意義のある場所として、文化が生まれる場所としてしっかりとフォーマットをデザインする必要がある。

■日本の立場の変化

2020年ドバイ博日本館で打ち出したテーマとして「地球交差点」「Crosspoint for the Future」がある。これは、世界のどの国も体験したことのない課題先進国だからこそ取り組むべきテーマとして考え、今まで日本が様々な分野で参考にしてきた諸外国を追い抜き新しい課題へと取り込むことで得た知恵や知見を様々な国にシェアするハブ＝交差点として機能すべきではないか？といった問題提起から来ている。2025年の大阪万博でもその課題は今よりも更に明確化され、新しい課題や解決方法・ライフスタイルやデザイン、考え方、哲学をシェアする機会になるべきだと考える。また開催国として、今後日本の世界での産業への役割を更に明確にしていくべきだと考える。

■世界の産業の発展の新たな始点

2025年のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」「Designing Future Society for Our Lives」ということで、この万博を世界の新たな始点としてSDGs、第四時産業革命の実装の機会になるべきだと思う。そのため、各国のパビリオンではその国が伝統的に取り組んでいること、新たにに取り組んでいることをしっかりと伝えてもいつつ、日本が全体のファシリテーターとして問題の解決策をつなぐことや、新たな国同士のアライアンス等をつないでいく役割を持つべきだと思う。ドバイ万博のテーマである交差点もそうだが、日本の頭上で問題を持っている国と解決策を持っている国が強力しあい世界の問題を解決するような視点が必要だと考え、

業界を超え、国や文化を超えて共有することで本当のかがやく未来が構築される最初の一步としていきたい。そのきっかけ・新たな始点を万博で創ればと思います。

■思想から実装へ

今まで多くの国際博覧会や展示会では思想(THINKING) やプロトタイプが多かった。しかし時代の流れる速さがさらに加速することが考えられる近い将来は「思想」よりも、「思想の実装」が重要に成ってくることは明らかなため、この万博では実践 (PRACTICE / INSTALL) をできるだけ促す加速装置としての万博になると良いと思う。SDG s も同様この場所で実装されていることをしっかりと見せていきたい。

■日本のノウハウのシェア

日本企業は「共有／シェア文化」の波に乗れずまだ企業単体・業界で世界に対して勝負することが多く、結果として様々な分野で遅れを取ってしまっているイメージもある。

日本の企業、国として先進国として、課題先進国として様々なノウハウを持っている。それは世界に誇れることであり、だからこそまだまだ日本の産業は強い。

日本企業にしかできないこと、日本の文化で育ったからからこそ出来る視点やデザインがまだまだたくさんある。大阪万博では様々な日本の IP を世界の国や企業と共有する事を始めるきっかけになる事を期待したい。世界からノウハウを学びに日本へ来ると共に、日本自身もその体験によって新たなアウトバウンドビジネス、日本文化のさらなる発信のきっかけを得ることが出来ると思う。

■デザインの力 若い才能の力

1970年の大阪万博では若い才能が多く起用されました。

また、それをきっかけにたくさんの日本ならではの工芸やデザインが世界に広まりました。今回の2025年の万博でもその様な機会を若い世代に対して与えることができればと思います。すべてを若手がやるのが正解ではなく、1世代が2つ以上の万博を経験することが出来る国として様々な分野のオールスターが参画出来るようなプラットフォームを構築すべきだと思います。

■体制とシステムのアップデート

2020年ドバイ万博を進めるにあたって気づいたことだが、プロセスのデザイン、チームのデザイン等フォーマットとしてアップデート出来ることがたくさんある。例えば建築の公募は基本デザイン・実施デザインを一社が担当し、施工を入札して違う企業が担当する。今の建築業界にはデザインビルドの仕組みが多く導入されているため、現在の入札切り分けの仕組みも見直すべきところは多くあると思う。

■2025年大阪万博で実装を望むこと

①スマートシティ実装

日本においてスマートシティは各業界では言われているものの、

まちづくり・都市開発・ICT・IoT・オープンデータ・交通インフラ・ライフライン等包括的に創られたケースはまだない。日本企業は各分野に特化して世界的にも強い分野であるものの、実装ができないことで諸外国から遅れを取っている。2025年には万博敷地内は少なくともこの仕組をオールジャパンとして実装すべきだと考える。

②日本国内の業界をつなげる・関西をつなげる

現状国としては大きな規制緩和や新しい方針を打ち出しているにもかかわらず、別の業界とのプロトコル（言語・意識の統一化）は整っていないイメージがある。今の時代には他業界が一つのことに對して取り組む事をしなければ新しい変化ができないのだが、それが日本国内では競合関係を意識するあまり情報共有も少なく、協力した大きな実装ができないイメージがある。結果として素晴らしい技術は持っているものの、実証する場所は日本には無く、アウトバウンドマーケットに対しても訴求ができない。①のスマートシティに関しても同様の問題を抱えている。

2025年大阪万博では様々な業界内の連携や他業界との連携等今後レガシーとなる様な新しい体制・プロトコルを創ると共に、多くの国際企業の拠点がある関西の強い連携も期待したい。

③世界中から各業界が入れ替わり集まるような万博の可能性

日本は医療やインフラ、ICT、機械、哲学等で他の国からみても独自の進化を遂げています。また世界を牽引していることも明らか。そのため日本に様々な業界のカンファレンスが行われ、それに伴って時期を別にして日本に集まっている機会も多く存在する。今回の万博ではそのばらばらに行われている様々な業界のカンファレンスや展示会を束ねて例えば週替りで違う業界の世界カンファレンス・展示を行うなどして、様々な業界の人・興味関心の人が世界中から訪れるなどの議論の場としても機能すると良いと思う。

④1970↔2025 メイン会場とサテライト会場

55年の歳月で日本はどの様に成長し、どの様に变化したのか、変化していないのかをしっかりと比較して展示することも大事だと思います。1970年大阪万博の象徴でもある太陽の塔・万博記念公園が残っているので、夢洲をメイン会場（FUTURE）として万博記念公園をサテライト会場として比較展示するなどのレガシーを使った展開を是非検討してほしいです。

以上